特集

現代社会における家族ならびに結婚の意味を問う

Part I 現代社会における結婚の意味とはなにか

シングル単位視点からみえる「結婚」と「恋愛」

伊田 広行

要 約

結婚を近代主義の発想の枠内で議論しても意味がない。社会が変化しているし、人権・多様性の尊重の観点から、新しい水準への移行が望ましいからだ。いま必要なことは、①本質視から脱して、多様性を受け入れるように、②社会変化からのメッセージを受け止めて、③システムを多様な生き方に中立、すなわち反差別的なものに変えることである。

これは人間関係を考えるときの基礎である「恋愛」の考察についてもいえる。みんなが「ラブラブ」という「カップル単位」状態を標準とは考えられない。とすれば、複数の人を愛する問題、嫉妬、秘密についても、根本的な再考察が求められる。シングル単位論の立場では、二者排他性と嫉妬の権利はなく、秘密はあってもよいということになる。各人がシングル単位感覚を身につけてこそ、新しい名のない親密な関係がつくられていくであろう。

キーワード：家族単位、シングル単位、多様性

2003, 家族社会学研究, 14(2): 13-22

A study of marriage and love

—From the viewpoint of a “single unit” system—

Hiroyuki Ida

Abstract

The social unit in modern society has been the family or the household, but I think it caused infringing on human rights in households and society. If the social unit is changed from the family to the individual (single), we can find new human relations in marriage and love.

Key words : family unit system, individual (single) unit system, diversity

2003, Japanese Journal of Family Sociology, 14(2): 13-22

I. 非婚化状況が発信しているメッセージを読み取ろう

「結婚の存在意義、結婚の意味」を問うという問題設定はいいとしても、その「返答」に徹底した相対化を含む多様性が十分意識されているのか、それとも何らかの普遍的本質をめぐる議論なのかで、話は大きく変わってくる。現状において「結婚の存在意義、結婚の意味」が社会平均的にあることは認めるが、それを共有しないものにとっては説得力がない。社会平均的な議論はいつい何のためにあるのだろうか。たとえばそう思わないものに対して、「人間は、みな家族をつくって、法的・社会的な承認を得ることが必要だ」といったいどうして語れようか。だれがだれに向かって語りかけているのか。いま必要なことは、①本質視から脱して、多様性を受け入れるように、②変化からのメッセージを受け止めて、③システムを多様な生き方に中立、すなわち反差別的なものに変えることである。

1. 結婚の本質視の無根拠性

筆者は拙著（1998b）で結婚行動をメリットとコストから記述したが、もちろん、結婚とはそのようなものではないという反論があることは分かっている。「結婚は人生の賭けで、永遠の愛を誓うなにかしら神聖なもの。永遠の愛ということは現実には無理かもしれない。でもだからこそ人はそれほどの覚悟をする特殊な儀式である結婚に深い愛をみて、そこに感動する。お互いの意思の強さに感動する」というような。

結婚にそうした意味なり価値を付与する人がいるのは現実であるが、それがあらゆる結婚の普遍的本質といえる根拠はない。そのような「イメージ」を信じている人がいるというだけのことである。そう思わなければそうでないという程度のことである。しかし、多くの社会では「理想の結婚」「理想の家族」というものがあり、それを基準に他の結婚やライフスタイルや関係や家族を批

判するということが行われている。

大事な点は、ある人やある社会が信じている「理想の結婚」だけが結婚のすべてではなく、上記したように、自分にとってプラスになるからとっている行為であるという側面がある多様な「結婚のような、なにかしらの親密な関係」があるということである。とするなら、その側面を謙虚に見つめることが大事である。

また社会的には、結婚は多くの人を社会秩序のもとにコントロールするための手段であるといえる。性関係を婚姻内に限定し、家族の相互扶養、子育てなどを家族の責任として、人々をマジメに働かせ、かつ社会保障的機能（人の生産にかかわることなので再生産機能ともよばれる）を負担させているのである。

それは1つの社会的な統治形態であり、1つの分業・配置であるが、根本的に考えてみれば、結婚制度を通じることだけが唯一の「性や再生産（社会保障）の配置」のあり方ではない。

しかし、これまでの結婚論は、初めに結婚の「本質」ありきというものがほとんどだった。たとえば、望月嵩氏の結婚把握（①性的秩序を維持するための、社会的に承認された異性間の性関係、②子育てをするために安易に解消してはならない義務的継続的關係、③夫・妻役割・性別分業を遂行し、扶養の義務、貞操の義務などがある関係、④手段的關係でなく、相手を「他をもっては替えがたいもの」として選び合った全人格的關係）は、その典型であった。

この多数派が当然と思っている「常識」に普遍的根拠があるだろうか。たとえば、性関係やカップル関係は国家や世間から社会的に承認されなくてはならないことであろうか。考えてみれば、だれとセックスするか、愛し合っているかを、別にお上や会社の人や近所の人に届ける必要はないことかもしれない。必要な範囲で、身近な人が自然と「あの2人仲がいいね」と知ればよいだけのことかもしれない。

それに対して、シングルマザー、非嫡出子、同

性間のパートナー関係、独身者などに関する運動で、「法的、社会的な要求」を出すことから、家族にかかわる人間関係には「法的・社会的な承認を得ることが必要だ」と反論する人がいる。

しかし同性愛者の権利要求運動では、同性間パートナー関係を「国から承認してもらおう」「認めてもらおう」としているのではなく、同性間関係を異性間関係と同列に扱えといっているだけである。子どもも、生育の過程で教育などが権利として保障され、公平に扱われるようにするための登録や記録がいるだけであって、親の所有物として「国が認める」というものではない。多様な生き方を公平中立に扱うというルールを求めているのである。社会的マイノリティが求めているのは、権利を認めさせること、ジャマさせないルール、差別されないルールの確立という意味であって、保守主義者が「夫婦関係は社会的なものであって私的なものではない」という意味での「社会的承認」とはまったく違う。

同じように、根本的に考えてみるべき課題は無数にある。性関係は異性間だけが正当・普通なのか。生殖のための性は、セックス全体のほんの一部であるにもかかわらず、性を結婚と結びつける根拠に生殖・異性間をもってくることに説得力があるだろうか。快楽の性自体ではだめなのか。性が全人格的な関係と結びついていないといけないのか。愛とはなにか、なにかを愛がないと言い切れるのか。容易に別れてはだめ、相手を変えるのもだめといっても、気持ちが離れたり、抑圧的状况にあったりすれば別れるのが当然ではないのか。手段として関係を考えることは悪いことなのか。子育ては夫婦だけでするものなのか。地域で行うものではないのか。ひどい親である場合、子育てを親まかせにしてよいのか。継続性や役割義務など関係の強制は、それ自体がマイナスをもつのではないのか。現実には相手のことを深く知らないまま勢いや思い込みで結婚し、「こんなはずじゃなかった」とか、もうすでに愛情はなく、「惰性や打算でいっしょにいるだけ」などと思っている

夫婦は多いが、その現実と上記の本質的性質とは矛盾しているのではないか。介護もまず家族が無償で行わなくてはならないものといえるのであろうか。専業主婦には税の控除がなされるのは当然といえるのか。

そういうことを1つひとつ真剣に考えていくと、結婚や家族とはこのようなものと言い切れるものではないことが分かる。考えてみると社会科学の素養を少しでももつならば、近代化が終焉した段階で、近代主義の価値観の普遍性の無根拠性が露呈するのは当然である。「普遍、普通、当然、自然、真理」がないとすれば、「普遍的結婚」「普通の結婚」がないのは当然である。望月氏のように結婚はこうあるべきものというのは、自分の価値観（近代主義の限界）を基準とした決めつけにすぎない。学問的装いは、主張の正当性を保障するものでなく、客観を装った主観にすぎない。自分の利害から生まれた行為だという現実を覆い隠す道徳主義的態度でしかない。現実よりも理念を優先させた転倒した把握である。学問分野だけでなく、メディアや社会でもまだまだポスト・モダン水準での認識が広がっておらず、近代主義的決めつけがのさばっている。変化を受け止めずに、ある価値観から否定するだけでは、新しい時代の解決策はみえてこないだろう。

2. 非婚化を受け止めよう

結婚や家族や恋愛というものが神秘化され、合理的に分析されずにきたことを、私は「家族単位の前提化」とよんで、そこに光を当てて「幻想」をはがしてみた。社会環境が変わるなかで、結婚に対する考え方も多様になり、従来の「性分業に基づく夫婦」という1つのタイプのみが正しい＝「したがってそれを標準とする」という構図が崩れるのは当然である。結婚や家族とは特定の「堅いもの」ではなく、時代や文化や個人差やライフステージとともに変化しうる「やわらかく空虚なもの」である。

未婚・非婚が増え続けており、この傾向は当面

続くと思われる。なぜなら「もてない＝結婚できない人」と「結婚の必要がない人」が増える非婚化傾向が反転する要素が、いまのところあまりないからである。男女平等意識と、女性の社会進出が進み、結婚の必要がない人（自由重視の人）は増えるであろう。小倉千加子氏は、若者は癒し系の結婚をするから晩婚化は止まるというが、それを選ぶのは一部だけであろう。経済状況の悪化は進み、年功賃金制度からはじき出される男性が増えているので、「一家を養い家族を守る」という幻想をもったままの結婚において、結婚の基盤が減っていく。変化は避けられない。

結婚が生活の「前提・手段」から、徐々に余裕の活動に移行しつつあり、恋愛・結婚の期待水準が高くなる。そのなかで、「もてる人」と「もてない人」の格差が出てくるのは必然である。もてない人（結婚したくてもできない人）はもてないなり（結婚できないなり）の生き方を見つけていくしかないであろう。

主観では、まだまだ「結婚したいのにできない」というのが主流であるが、しかしそれは表層の表現でしかなく、その言葉をそのまま受け取るのはまちがいである。「結婚したい」というのは、そういう表現＝カタチしか知らないからであって、「結婚」という言葉の中身は、幸せになりたいとか、つまらない日常に変化がほしいということである。そしてその幸せは、必ずしも現実の結婚という形式自体にはない。大きな時代の変化の方向は、結婚という形式にではなく、個々人の幸福追求行動が多様なカタチで増えていくということであり、それは、環境変化と連動して、実際には結婚の減少、離婚の増加という行動となっていくのである。

そうした流れのなかで、これから徐々に増えていくのは、結婚自体の「神秘化・道徳的強制力・堅さ」の低下であり、結婚と結婚以外の境目のあいまい化であり、非婚・晩婚・離婚・夫婦別姓・（夫婦として暮らすが婚姻届は出さない）事実婚・同棲といった多様な生き方の増加であろう。

個人は多様な生き方のバージョンのなかから自分にふさわしいものを選ぶようになるであろう。

目にみえるのは、性役割に基づく専業主婦型世帯の減少、女性の就労・社会進出、DVや児童虐待、介護疲れ問題などであり、簡単に結婚し、また簡単に離婚するというような風潮がいつそう進み、結婚でなく、独身で働いて、時々恋人がいるというようなことも増えていくであろう。結婚している夫婦の関係も、「一心同体、秘密なし、干渉や依存や嫉妬もあり」から、徐々に、相手の自由を尊重し、邪魔をしない、お互い距離をおく関係に変わっていくであろう。家族が「生産の単位」から「消費・楽しみ・生活の単位」になり、さらに夫婦だけでなく親子も含めて、個室で好きなテレビを各人がみる、食事バラバラというように、その生活の単位が個人化しつつある。家族があるとしても、個人の集合体の様相を強く帯びてくるであろう。

少子化も、子育て自体の大変さ、経済的負担の大きさ、取り巻く環境の劣悪さなどが知られるにつれ、さらに進展していくであろう。

3. 変化する現実の受け止め方

そうした変化を「いい、悪い」と、自分のある種のバイアスがかかった価値観から評価しても意味がない。多様化が進展するのは、環境の変化と市場原理の進展とお互いの考え方と自由を尊重した暮らし方を各人が追求し選んだことなどが絡み合った結果であって、それを「人間関係が悪くなった、バラバラになった、会話がなくなった、愛がなくなった」という悪い意味での「家庭崩壊」と決めつけるのはまちがいである。

大きな社会の変化には価値観の急速な変化がともなうのは当然である。これまでの常識が通用しなくなり将来のビジョンが不明瞭なとき、多数の人々が不安を感じるのは当然であるが、変化する現実と不安を受け入れるのか、それとも「過去の家族がよかった」と嘆き思考停止するのかが問われている。リアルに現実を認識し、変化と不安を

受け入れ、以前の「理想的な結婚」に対して、多様な立場から、新たな「理想の結婚」や「理想の関係」が模索あるいは提起されているとみるのが、前向きな態度だろう。

私たちがなすべきことは、現実（の変化）を受け止め、どのような問題があるかを考え、それに対処（受け入れて社会と意識を変えていく）していくことであろう。予想に反して、多くの場合、破滅的な結果というよりも、別にたいした問題とはならず、淡々と社会は続いていくであろう。人々は愛し合い、子どもを育てていくであろう。ただ、その形態が変化し、多様化するだけである。

非婚者の増加、少子化の進展という現象は、結婚したくても結婚できない、子どもを産みたくても産めない、結婚や出産を躊躇せざるをえない社会環境があるというだけでなく、積極的な社会変化の一面を表している。それは、社会が旧来の家族単位システムではだめで、そうでない方向に社会を変えるべきだという信号を出しているという側面である。多数派の意識としては、家族単位のままの人が依然として多いが、取り巻く社会環境が変わってきたので矛盾が大きくなってきたのである。非婚化や少子化というシグナルを、「結婚や出産を躊躇せざるをえない社会環境を変えよう」という前向きのメッセージと受け取ればよい。

つまり、結婚していない人が増えること自体が問題なのではない。結婚している人たちと結婚していない人の両方が共通に抱えている問題がある。そこが発しているメッセージを正しく受け止めないことが問題である。それは、「性役割を組み込んだ結婚をするのが当たり前（＝単位）」というあり方自体に、女性の不満や非婚化や少子化、離婚、長時間労働、社会保障の行き詰まりなどをもたらす要素がはいっているということ、つまり、家族単位制度が制度疲労を起こしている、という問題である⁽¹⁾。女性の就業意欲を生かさず、能力を発揮することができない、従来の家族・結婚・職場のあり方自体が問題となっているのだ。そうだとすれば、大事なものはこれまでと異なり、「結

婚という標準」が崩れていき、多様な生き方が不利益なく選べるようになり、相手の自由や人権を侵害せず、適切な距離をとり、適切にコミュニケーションする能力をもてるように意識と制度が変革されることなのであって、その結果、新しい連帯やつながりが生まれるであろう。

4. 多様な生き方に中立・公平な制度へ

結局、未婚・非婚の人が社会に増えても、それにとまって制度・政策と意識が変わればよい。社会的対応としては、どの生き方を選択しようともとくに差別されたりしないように、従来の特定の家族のみを標準とすることをやめて、個人がどの生き方を選んでも公平に扱われるような仕組みづくりと、負の部分への対処が必要になるであろう（現状はあまりにも独身者・離婚者、共働き子育て夫婦などは不利なので、そこへの不満が高まっていくだろうから）。

「結婚し仲がよくて理解し合えて当然」というところを基準（ゼロ、出発点）にすると、あとはマイナスだけとなる。不満をもったり、理想的家族ではないと嘆いたりするだけになる。必要なのは、そういう「理想の家庭当然」の発想をやめて、もっと不幸とか事件とか、考えや意見の違い、理解し合えないこと、多様性をリアルにとらえて、離婚も独身も死別も同性愛も子なしもさまざまなあるとして、それを組み込んだシステムにすることであろう。

5. 非婚増加問題でなにが必要と提起されているのか

家族をめぐる状況で、なにか問題があるとすれば、真の問題は、非婚化や少子化ではなく、コミュニケーション能力、人権、自己決定の尊重などが大事になってきたにもかかわらず、それらの点で適切な対応がとれない人が多いという点である。これがあること自体が問題であり、それがあるからこそ、家族関係もうまくなりかなくなっているといえる。

つまり、結婚というカタチの内側にいるか外側にいるかに関係なく、親しい人との間のコミュニケーションの質こそが問題なのである。現在は、相手の自己決定や自由を尊重できない干涉的・依存的な人が多い。それは家族や恋愛を共同体主義＝単位的に美化して問題と感じていないためである⁽²⁾。時代が求める望ましい質でかかわれていないがゆえに、それが家庭崩壊、家庭内別居、虐待、暴力、DV、親子の対話不能、簡単にひっついては別れることの繰り返し、などとなって現れている。

これは、人権問題をとらえる水準が高くなってきたため、以前なら問題とならなかったことが問題となってきたともいえる問題である。その意味では、時代はようやく、家庭内外の人権を繊細な水準でとらえ始める時点にまで到達したということであろう。

従来「世間並みの幸せ」というカタチにこだわり、家族単位思考をもつ限り、不幸や抑圧は続くだろう。だから、何らかの意味で、「世間的価値観＝世間体＝結婚しなくてはならない、子どもをもたなくてはならない」ということから外れて、内的に自己肯定できるようになればいい。戸籍や結婚概念などのカタチにとらわれることなく、適切な関係をつくる能力を1人ひとりがもつことこそが求められているといえるのではないだろうか。

II. シングル単位発想で恋愛を考える

1. みんなが「ラブラブ」という状態を標準とは考えられない

現代において結婚・家族を考えるためには、「愛」の考察が不可欠である。ここではその作業のひとつとして、「愛」の一面を象徴している恋愛について考えてみよう。

恋愛感情といっても、無から突然湧き出すものではない。無意識のうちにその人がもっている「好きになるときの評価項目表」のようなものがあって、その総合高得点の人を好きになって、

恋愛対象としているのである。しかし愛と恋愛と結婚とセックスと人格の5者は、いまだ一体のものとして多数派にはとらえられている。拙著(1998b)では、その点を批判するために、恋愛を、知的要素、性的要素、なじみ要素(ほっとする要素)、地位達成要素、生活便利要素、恋愛ゲーム要素といった項目(ときには支配欲求要素も)から成り立っていると分析した。

結局、恋愛とは、人を比較し、順番をつけて、一番自分を幸せにしてくれる相手を選び、好きになる行為であり、相互作用を楽しむ行為である。それが悪いといっているのではない。自己利益のために人は生きている。恋愛も例外ではない。

恋愛を自分の幸福度を高めるための活動ととらえたうえで、その恋愛の質の向上を目指すのが「シングル単位論」とするなら、そのスタート地点は、「みなが幸せな家族をもたなくっちゃ」「そうでないのは不幸せ」という幻想を壊すしかないという一種の「あきらめ」のうえに、新しい関係を模索していこうとするところにあるだろう。

どうして、世界中の人全員がうまく、「完全に理解し愛し合える相手」をもてる保障があるのだろうか。人と人がいっしょに暮らし続けるといことは非常にむずかしいことである。いっしょに暮らし続けなければならないとはいえない。従来は、社会が男性に女性をあてがったことにより、多くの人が結婚してただけである。結婚しなくてはならないという常識・とられからの解放がまず必要である。しかも「恋愛の6要素」をみても分かるように、人が人を好きになることは、総合得点が高い人を好きになったというそれだけのことでしかなく、それが双方一致することさえ、偶然である。また、その感情が長く続くことが当然とはいえない。

シングル単位論は、みなが最高の、問題もない、平等で理想的な、パートナーや家族や友人や仕事に取り囲まれるというのは無理な話だという「現実主義」から考える。この世の中は不公平で、「幸せ」が多い人と少ない人がいるというこ

とをふまえてはならない。それは努力にもかかわっているが、運・不運や、生まれつきの能力、育った環境、個性などにもかかわる。トラウマを抱えざるを得ない環境に育った人がある。人生には、暗闇がある。個人にはどうしようもない面がある。

したがって、自分が不幸なときも、自分だけが不幸ではないし、自分だけのせいでもないと思うこと、逆に自分が幸福なときも、自分の当然の結果である（自分の能力や努力だとうぬぼれること）とか、みながこうなるべきだと思うのがまちがいである。まして、相手のことを分かっているとか、相手は自分のことを分かってくれていると思うようなことがまちがいである。異質な相手と自分とが「つながっている」という感情を基礎に、シングル単位感覚で友情的関係を育てることのみが希望である。

筆者は、みなが素晴らしい対人能力（差別しない、依存・抑圧しない能力）をもてるという展望は、当面は少ないと思う。したがって、各人はもっと1人を基本に、相手を抑圧しないという関係（能力）を当面、学び続けなくてはならない。その過程で、非抑圧的に大切にしようとか、楽しみ合えるという意味での「愛し合える」人も増えるであろう。

しかし、そのような関係は、永続的・固定的な「結婚というもの」ではなくなり、全体としては流動的な関係、一時的な関係となるであろう。出会いの運、不運ということもあるし、相性ということもある。複数の人との親しい関係ということもある。「差別しない、いい人」同士だから恋愛となるというものではない。セックスをする親しい友人があってもいい。

「学ばないやつ」がいるだけでなく、向き／不向きというものもあるので、なかには恋人関係を全然つくらない人も、つくれない人も、作りたくない人もいると考えるべきである。（強制がなくなるので）片思いが多くなるのも必然である。多くの人が「シングル単位的発想」になれば、

「恋人」といっても所有的、単位的ではない関係になるであろう。恋人がいらないという生き方を受け入れる人も増え、恋人がいるというのは、「1つの一時的な形」でしかないということになる。

それはちょうど、プロのサッカー選手になれる人が「一部」、人生でサッカーをしているのが「一時的」ということと原理的には同じである。みなにサッカーを強制すること、サッカーしないとニンゲンではないと思わせる同調意識こそが問題である。

この考え方は冷たいように聞こえるかもしれない。しかし、2人に閉じた所有的愛情よりも、私はスピリチュアルな開いた感覚としてのつながりのほうが、普遍的なアイデンティティを与えられる力があると思う。つまり、特定者への閉鎖的エゴ的役割的愛情ではない形で、人は類的な欲求を満足させられると思う。つながりの行為をしたい、だれかのためになにかをしたい（私の存在によって人が癒されたり喜んだりするのがうれしい）という気持ちは、「恋人（家族）がいる」ということの代償になりうると思う。

言い換えれば、そちらの行為こそ不可欠で、恋人や家族との関係もその形態ということになるだろう。その意味で私は、家族や恋愛関係を全面否定しているのではなく、そのスピリチュアル化（および人権擁護化）を提起している。

2. スピリチュアルな関係へ

先にみたように、恋愛の本質を暴くために一度、各要素に解体してから、それでも上記の要素に入りきれない、素晴らしい要素にも言及できると思う。すなわち、スピリチュアルな要素である。人の関係には、その可能性があるのである。

No.1をつくるという「対・共同体の発想」と異なる意味においては、筆者は「特別な関係」はありうると思う。AさんとBさんとが、私とある人とが、相手の「測りがたさ」を認めつつ、相互の〈たましい〉が交流して、他のだれとでもない、その人との特別な関係をつくったという「結

果」はあると思う。結果であって、契約などの形ではない。結婚とか恋人宣言といった外への公表ではない。

その特別な関係は、複数の人と、それぞれ独自なものとしてつくることが可能である。二者排他性や性別役割から離れているという意味で、その関係は、従来の恋愛感情や家族愛の枠を超える。

「対」という形でなく、瞬間の質、その積み重ねが「特別な、スピリチュアルな関係」をつくるであろう。従来の狭い「愛」概念とは異なる、そのようなスピリチュアルな関係をもてた、そのような関係があることを知ることができたという喜びを、伝えていきたいというのが、シングル単位の恋愛論である。

つき合ったり結婚したりした後、別れてその2人の間に友情があるとか、複数の人と親しくなるとか、相手に「自分のほかに好きな人がいる」ことを受け入れるとか、ステップ・ファミリーになるとか、友人が家族のように心を寄せるとか、相手へのさまざまな思い、子どもへの思いがあるといった、そのような複雑さはステキだと思う。その複雑さは恋愛や家族愛の枠組みを超えている。

「妻は夫の所有物」と思っているところから、つき合っている人がいる人、および結婚している人と仲良くすることは「人のものを取りること、他人のものに手をつけること」という意味となり、そこから「周りの人を傷つけること」「悪いこと」という考えが出てくる。そのような発想で罪の意識を感じている人は多い。またそこから禁欲的になったり、関係を制限したりしている。

しかし、所有物でなく、相手各人が自己決定すること、というところから思考を出発するなら、そうした感情に変化が出てくる。「罪悪感」とは何なのか、そこを丁寧に見つめていけない限り、突破口はみえてこない。過渡期の人間であるし、相手の周りの人は家族单位的な発想をする人が多いのも事実なので、「罪悪感」があるという「現実」は分かるが、それは不変とかどうしようもないものとはいえない。

筆者は自分が罪悪感をもって生きたくないからこそ、自分に正直ということと誠実であるとかスピリチュアルであるといったこととのバランスを考えている。それは名前をつけられない関係の創出というしかない。もちろん、相手があつてのことなので、こちらの一方的希望だけで関係がつくれるわけではない。こうしなければならないということはない、といいたいだけなのである。

他人が単純なカタチだけで、不実だ、人に道に外れている、まちがっているなどということのおかしさを、忘れないようにしたいと思う。人の事情はそれぞれで、簡単に「審判」を下せるものではなく、複雑さを複雑なままとらえていくようなことがいるのであろう。

いわゆる「不倫」関係で、「もうじき離婚して、あなたと結婚するから待ってください」とか、「早く出会っていたら、結婚を申し込んでいた」などの表現しかできなくなっているというのは、狭い「カップル単位」の枠のなかでしか考えられなくされてきた結果であろう。それはNo.1の席の取り合いの発想でしかない。もう、そのようなことはやめたいと思う。

3. シングル単位の恋愛

以上をまとめておきたい。筆者の恋愛論は、愛するという強い感情（情熱とでもいうべきもの）自体の否定ではない。その質（あり方、対象、範囲）を問題にしている。一方でいまの社会では、情熱が「去勢」されている。そのようななかで、恋愛が唯一、情熱を取り戻せそうなところであるとしたら……。そのとき筆者は、恋愛というルートにおいて自分の解放を考えるのも1つの手段ではないかと思う。恋愛の強い情熱は、生きるエネルギーになったり、自分の再発見につながったりする。抑え込んでいた根源的な願望が現れ出る契機となる。

「おとなしく家庭におさまる、会社におさまる」というところから脱する契機として、身近な人との関係を見直せばいい。自由な恋愛をしてと

らわれの状況から離脱すればいい。

ただ狭い意味での好きな人との情熱だけの話なら、それはしたい人だけ勝手にしろというだけのことだが、ここでいいたいことは、さらにもっと情熱的なことへ、情熱的な生き方へ自分を解放しようということである。恋愛関係を見直すとは、あらゆる人間関係を見直すことであり、自分の生き方を見直すことである。恋愛での枠組み突破はその1歩にすぎない。

「つき合う」といっても日ごろのその人の生きる水準が出るものである。恋愛だけ特別、いい面だけ出るなどということはない。メッキははがれる。日ごろの人間性、生き方の質が大事である。

「愛」の素晴らしさをいうなら、No.1に限定せず、友人や見知らぬ人にこそ、「与えられる」かどうかが鍵であろう。No.1以外、家族外に心をこめるようなやさしいことができるかどうかが本性であり、それが結婚や恋愛関係にも出るのであって、逆ではない。

シングル単位の恋愛では、「私はこの状態を選んでいる」という主体性ある姿勢が両者にあることが基本である。苦しいなら関係をやめればいい。巻き込まれ、翻弄される無力な存在になるなというメッセージだ。

また個人（シングル）が単位とは、恋愛（愛情関係）がないとだめとはいえないという覚醒でもある。1人が基本であり、そのうえでの関係のあり方を考えるのだから、それは友情も含めて、どのように人と接するかという課題があるだけといえる。

恋愛は選択の1つであり、孤独も選択の1つであるといえる。恋愛では「二者排他的で干渉当然、嫉妬当然」という思い込みを捨て、適切な距離をとる、名前のない関係にしていこうというのが、私の考える「シングル単位の恋愛論」となる。

それに、自分と他人は別だということを認めるということは、ある種の「覚悟」をもたなければならないということでもある。自分も相手も、相手の希望とは関係なく感情は変わりうる。いつで

も他の人を好きになったり、他の人と暮らしたりすることを選択しても、それは自由だ、というしかない。好きな相手に「別の人」がいても仕方ない、向こうの相手と別れるとはいえないという覚悟がいる。自分が相手1人だけを好きでもいいが、一般論としては、二者排他性の関係ではないと確認しておく。相手の自由を尊重するために、細かく生活をチェックし合わないことが必要であり、そのために必要なウソ、あるいは必要な秘密（隠しごと）があってもいいという覚悟がいる。

ただしこうした覚悟は、実はかえって心の安定をもたらすと思う。「完全に一体・二者排他的であるべき、秘密なし」という幻想にとらわれているときのほうが、その実現に無理がある分、精神的に不安定になりやすい。

以上を分かりやすくまとめるなら、「個人単位で考えていこう」ということと「原則として自立するのが当たり前」「恋愛をしてもしなくてもよい」「愛する人も他者である」「隠しごとを怒る権利や嫉妬の権利はない」ということだろう。

4. パートナー関係という〈物語〉

以上、シングル単位的な観点でパートナー関係、結婚、恋人、家族といった幻想から離れる自立のよさ（＝1人で完全・充実！が基本）を述べてきたが、それを確認したうえで、より現実的なバランスに話を展開しておきたいと思う。というのは、ここまでの主張は、それはそれで正しいと思うのだが、単純に「個の自立」をとらえてしまうとどうしても「つながり」の側面が軽視され、人間に必要な〈物語〉なり〈幻想〉の強さを見落しがちになるからである。

筆者はシングル単位論を主張するが、人は実は全体のつながりのなかで生きている「つながった存在」であると思っている。私の体は私がつくったものではなく、地球生態系、人間の歴史、世界中の他者・動物・植物があつてのことである。そのような人間は、だから本質的には、「全体的な関係性」というものを求めるもので、それがある

時代、ある個人には、その社会が準備した関係性の形（現代では結婚や恋愛という〈物語〉）が、その欲求の発現形態となるのである。

したがって筆者の主張は、そうしたある社会が押しつける「関係性のあり方」＝共同体主義に反発してそれを相対化するものではあるが、何らかの「全体的な関係性」や自分が立脚する〈物語〉自体を完全否定しているわけではない。よほど特別の人でない限り、人間は、むき出しの、なにもない「個」として存在できるものではない。「1人で完全」だが、その1人である私は全世界とつながった存在なのだ。したがって筆者の主張は、シングル単位という自立感覚をもつ個人と個人が、適度な距離で〈たましい〉という感覚を胸につながらるといふ〈物語〉を提起しているのである（伊田，2002）。筆者はそれを決して「パートナー」関係とはよばないが、二者排他的でないという意味で、開かれたイメージを基礎に、少数の親しい人とのある程度持続的な関係をイメージしている。それには名前がなかったが、最近では〈スピリチュアル・シングル主義〉の関係という名をつけて、シングル単位論のいわんとするところをより明示的にしようと試みている（伊田，1999，2002，2003a，2003b，2003c，2003d）。

これからの時代、お仕着せの〈物語〉の消費に飽き足らない諸個人は、筆者がしているように自分にとって納得できる新しい自分だけの〈物語〉をつくらうとしていくであろう。生きる意味とか手ごたえのようなものを得られるように、人々はやはり今後もこれまでの家族のような役割をもつ〈物語〉を求めるのである。それは、「家族の愛」という社会的につくられた古臭い〈物語〉の枠を超えて、新たな「親密なつながり」を他者とつ

むぎ出そうとする行為となるであろう。これまでの家族概念を超えた「新しい家族的なもの」はどのように自覚的に作り出されていくしかない。それはもはや「家族」とよぶにふさわしくないかもしれないが。

【注】

- (1) 家族を単位とした社会システムが、多様な生き方を阻害し、さまざまな人権侵害をもたらしていることについての詳しい記述は、拙著（1998a）を参照のこと。
- (2) 家族を単位ととらえることで家庭関係において干渉や依存や人権侵害が必然的にもたらされるということについての詳しい記述は、拙著（1998a），拙稿（2002）を参照していただきたい。

【文 献】

- 伊田広行，1998a，『シングル単位の社会論』世界思想社。
- 伊田広行，1998b，『シングル単位の恋愛・家族論』世界思想社。
- 伊田広行，1999，「スピリチュアル・シングル：生き方と社会運動の新しい原理を求めて」『大阪経大論集』50（1-3）。
- 伊田広行，2002，「新しい人権へ」『大阪経大論集』53（2）：59-93。
- 伊田広行，2003a，「〈ぎりぎり〉の実践へ：自分の振り返りと現在とこれから」『大阪経大論集』53（5）。
- 伊田広行，2003b，「新しい社会運動の模索：〈スピ・シン主義〉視点からの考察」『大阪経大論集』53（5）。
- 伊田広行，2003c，『初めて学ぶジェンダー論』大月書店。
- 伊田広行，2003d，『〈スピ・シン主義〉宣言』明石書店。